

淀門兩字一覽

ル 4
4992
3



淀川

兩岸

一覽

門ル
號 4992
卷 3

古歌三冊

二冊

淀川
半山
為



日上活地後器印
朝徳澤仰年豊千門
葉子氏相吉禮楽長
存三代机

栲齋

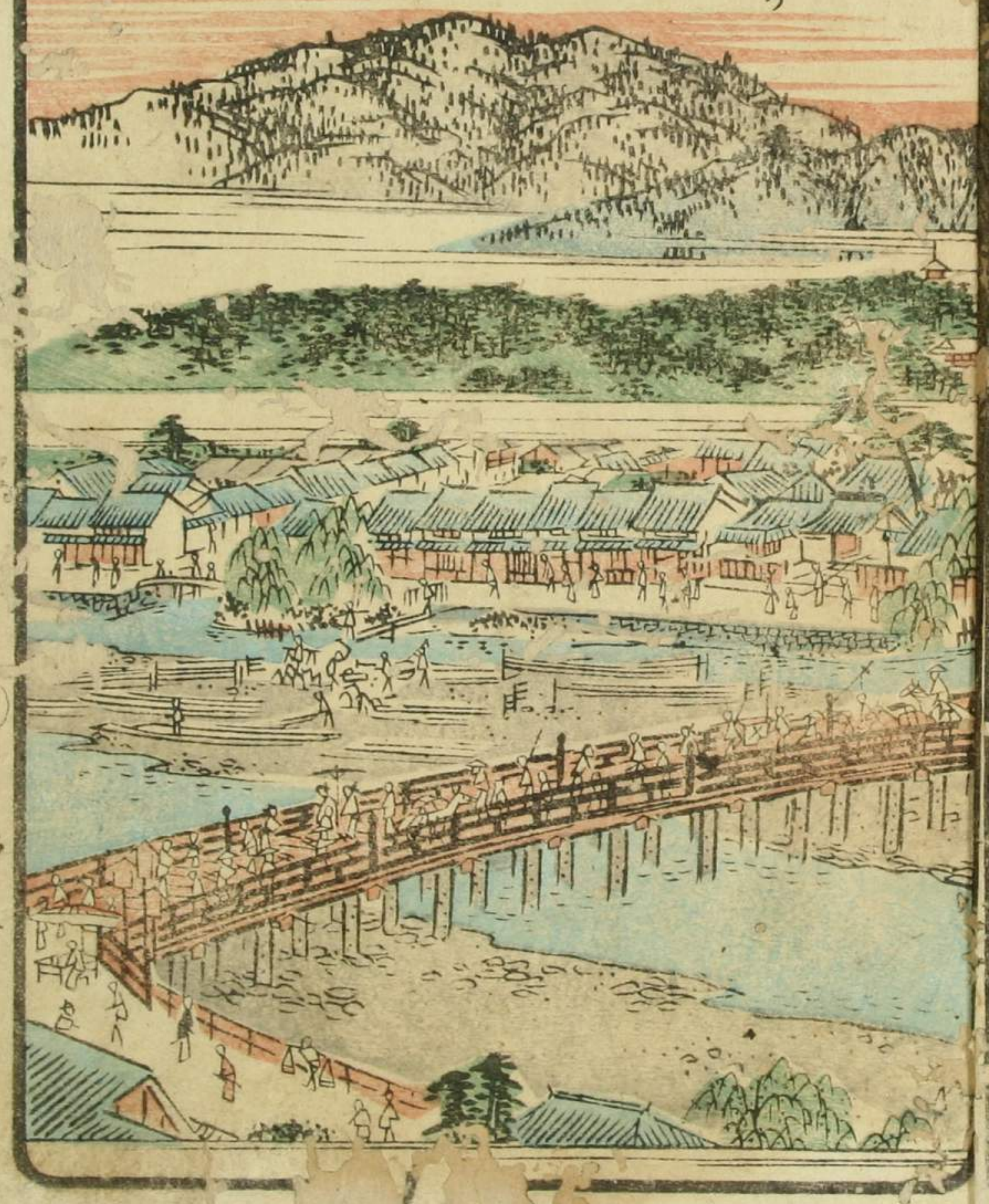


三條橋

三條橋
梅室
たのめり
たのめり



三條橋
梅室
たのめり
たのめり



三

四條橋

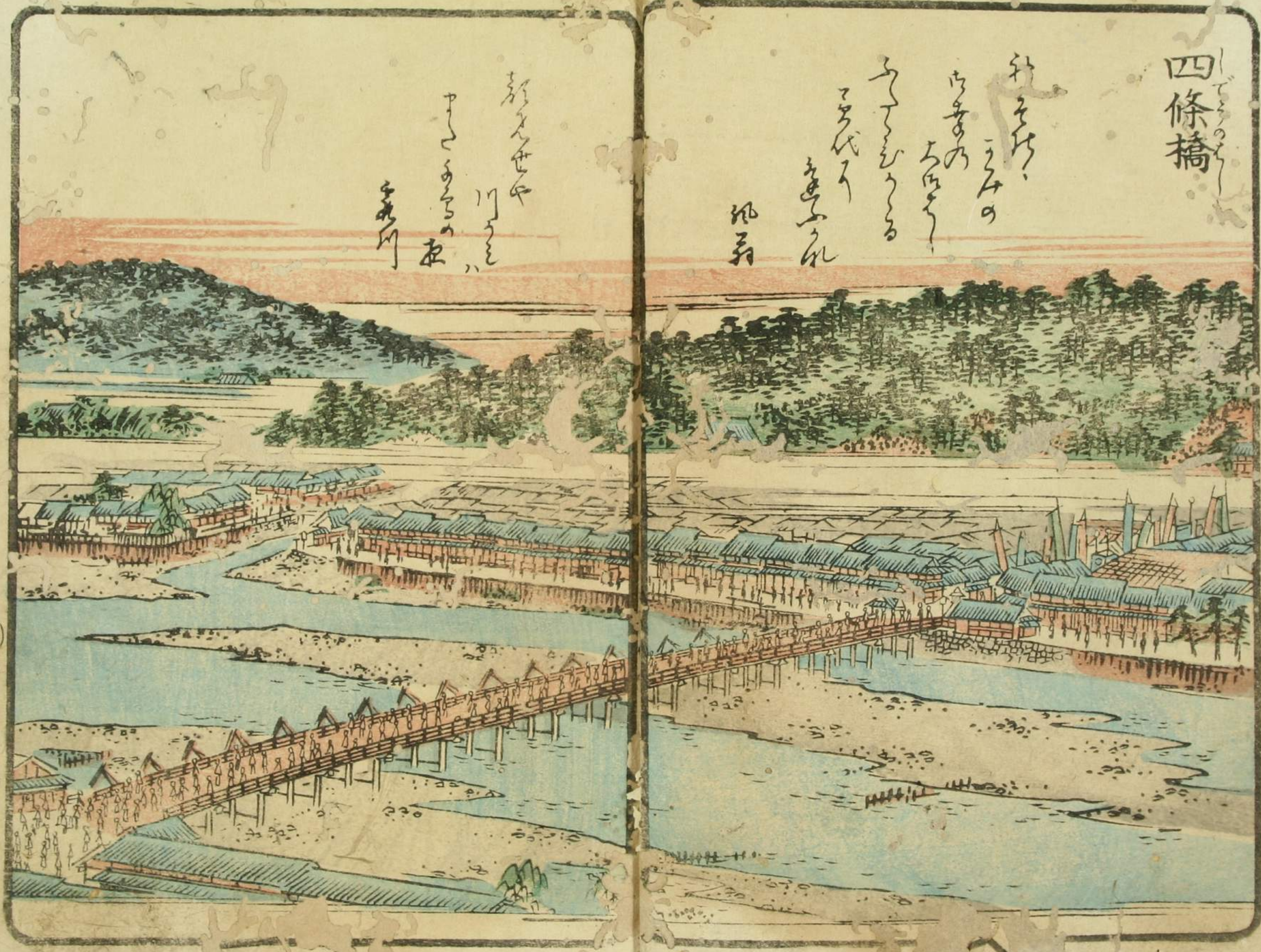
新古今

のまの

ふてむる

まふれ

地



新古今

のまの

ふてむる

五條橋 ごていりょうのきょう



まがねの村

從三条以下三橋
澄芳春翠画

みづのやま
うら
むら

芥子

舟の

あまも

せむ

支考



三
四

京師

詩經云 篤政南岡乃觀于京京師之也云是 鄭箋云都邑也

營立 處之 朱註 京高五里師之衆者之也

蔡邕獨斷云天子都之於河與京師之也

みいへく地下の多きもの水は過るなり地上の衆きもの

人は過るなり京の大なり師の衆なり大衆の居ると謂ふ

天子の都より雨雅より天子高き居て遠く視の意

あり師の衆なり人民衆くあふ聚ると謂ふ云抑平安城の

都の人皇五十代桓武天皇其基より今の御代に至る

一千有載遷都するなり 其例なり 定は天津日嗣

の位よりひてより御堂澤の津舟なる位の高が

の散るをびく億兆の歳と彌らんども知るる又都への華

の訓より花洛も秘せり

三條橋

加茂川は祭に東国より平安城に至る 喉口より多條の舟人常の舟の老免

洛陽三條之橋至後代化度往還人磐石之礎入地五尋切石

柱六下二本蓋於日域石柱盪觴乎天正十八年庚寅

正月豊臣初之御代奉増田右衛門尉長盛造之

相模野旅所

つるつる

まろろ

ちんちん

鍵のしるし

まろろ

つるつる

木のしるし

千歳舎

鶴成



更なるみん三條のり人通り

尺九

五條橋

三條橋の下に、松原通に架せり、則五條通に秀吉公の時此所を

つ目下橋の銘あり 維陽五條石橋正保二年乙酉十一月吉日

奉行

芦浦観音寺 小川藤左衛門尉正長

此橋上の半より東に向ふ洛東の勝地木の間に願れ
平安の佳景あらん止る

蒲團着る痛くともいひ山

嵐雪

古師より浪華へ船を下るなり 和太路 伏見郷屋と伏見

是本街道より老人足弱の徒り 岷川の下舟より

有又西の辺より伏見より東洞院の車道九條より東竹田と

伏見の黒門に至る或は油小路より竹田と経る黒門は出る是を竹田

街道と号し 西竹田東竹田の西 又陸路は東寺より鳥羽行舟と経て

又に至るも有或は伏見より淀は出るもあり又は東寺の四塚より

桂川と越る山越に至り高槻より鳥司江口津島と長柄み出で大坂

に至る 西街道或は山越越るも此道は長岡の天神向の明神山崎の八幡

直祖社

油小路にて条下る東例にあり 社内天満宮あり碑と建自辰の銘篆字岡白駒の華あり

とほこのまねまち
竹田分道
安久寺院



あご山



稻荷印 道祖神の南二丁より西の神輿五座毎年三月中の午の日此

竹田 同南より伏見往美福門路より此より西より真福寺の通り

安楽壽院の良の石と龜若の石より

安楽壽院 竹田村より 北の方の本堂より

本御塔 五重の塔に故人名あり

本尊卍字阿弥 此より西より

陀佛 佛の胸面に卍字あり此堂の薬師堂

三昧土佛 本堂の東より釈迦弥勒 基盤梅

此樹の下に埋めさすうみひなよ名あり

新御塔 南の方の本堂より 本尊地藏菩薩

八條女院の影に 二重塔 阿弥陀佛と安置

石の油小路より下る道條より 則安楽壽院の東門前より東

洞院の街道より出く伏見黒門に至る

柳茶店 東洞院通九条村より車道の傍

藤茶店 東竹田村より

高瀬川 加茂川の西より東竹田の北より

高瀬の川條の中頃内裏衾修理の材石と運がらん

了の作より嵐山の碑より見へる高瀬船

毎朝伏見より荷物と

角倉

柳茶屋
車道

牛の背中の
尾垂れ
如行

水と清さ
柳の影
文賢

沓作
車の上ヤ
風薫ゆ
衆雪
おそろいの
九條
阿んや
お茄子
掘只



高瀬川

傳朝老蹇就平夷
安坐不嫌篙子遲
官聞有便分水路
糞肥何必插官旗
已過離島市聲遠
漸及竹田林影垂
蕭寺今宵欲投宿
桃山恰是發花時

島棕隱

一寺也

河原よりうた

きく水

飄々



あつし

狗とつとつ

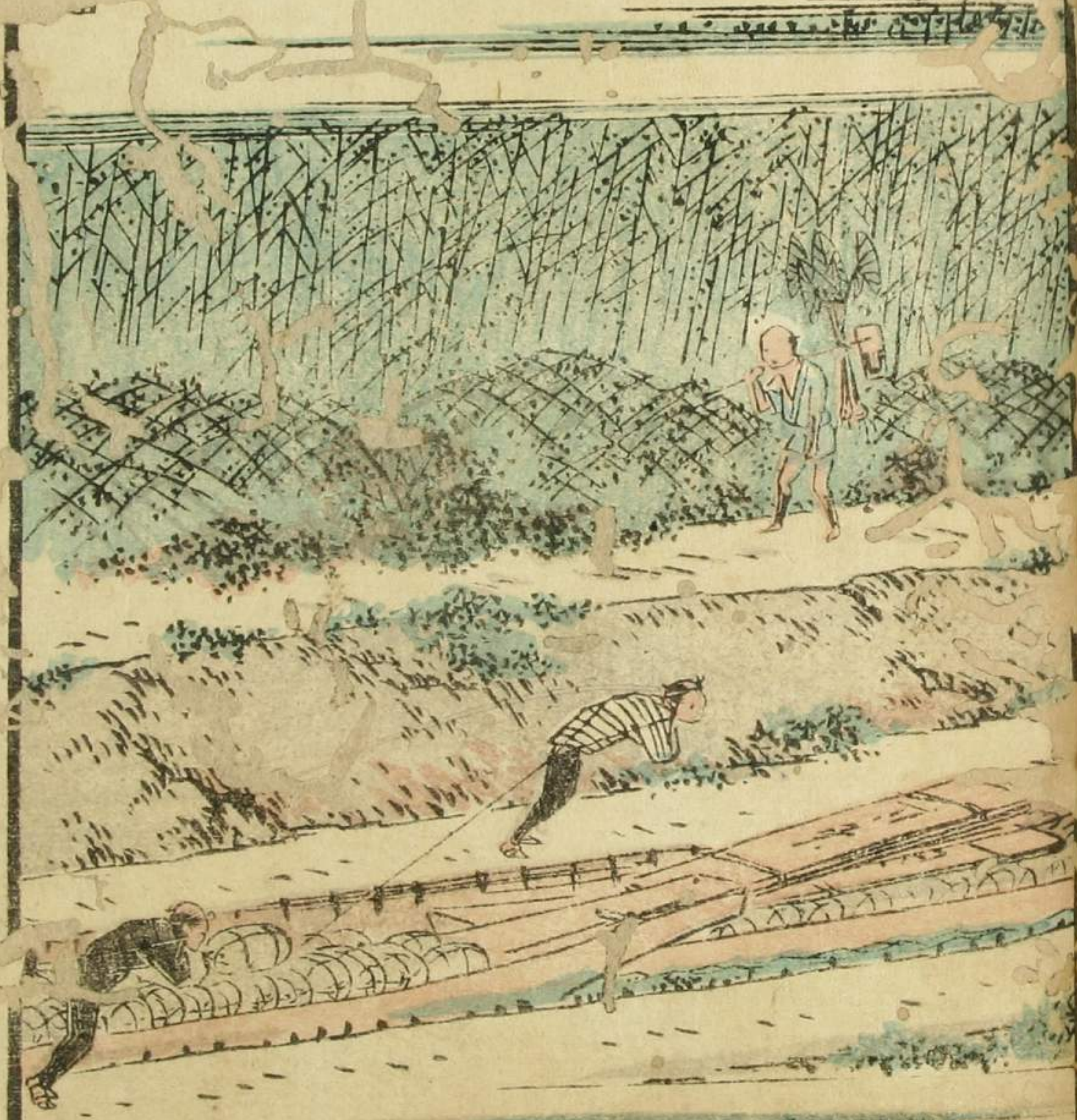
さけ

一刺

虫のまじ

中とつと

さけぬ



東竹田
藤茶屋

雅
牛車り
手籠り

力丸
谷沼の底

その男子のれん
織
洋丸



夕吼

娘
まろ

孫の冠

柳亭

苗とれと

水鏡の

啼や

竹田

塔



積て六郎と申上り又夕又荷と積て下は四條小橋より毎々伏見へ便舟のり

足とるも伏見のり東竹田の街道に此も船川に添ひ或は船のり下るる

伏見船場京橋阿波塔より大坂着岸の淀川の通船昼夜とるる伏見のり

あり出るあり其賑ひ言づくもつらば船宿の男女の軒に出

るか下りあれ今出舟がざざりまゝと声喧しく客と招く裏

より客支度と調ふ船頭の下り客と迎へ荷物と運上り

も下るも御機嫌克己船頭衆仕切と随分緩と取り札と付

さんせと定例の口上るる是も色々々

三三三 伏見肥後橋の向三三三上三三三下三三三の西本は福と号は

天武天皇社禪刹あり行基菩薩の御基にて本寺は下三三三村三三三生一神と例多し月十六日の夜とて大松明と

伏見口神輿の渡御あり是と三三三のたのまを下三三三の下三三三石鏡番所黒門あり伏見

淀堤京橋より此所まぐ水上凡十三丁半伏見口の下三三三伏見口より淀領の境まぐ水上凡十二丁半余

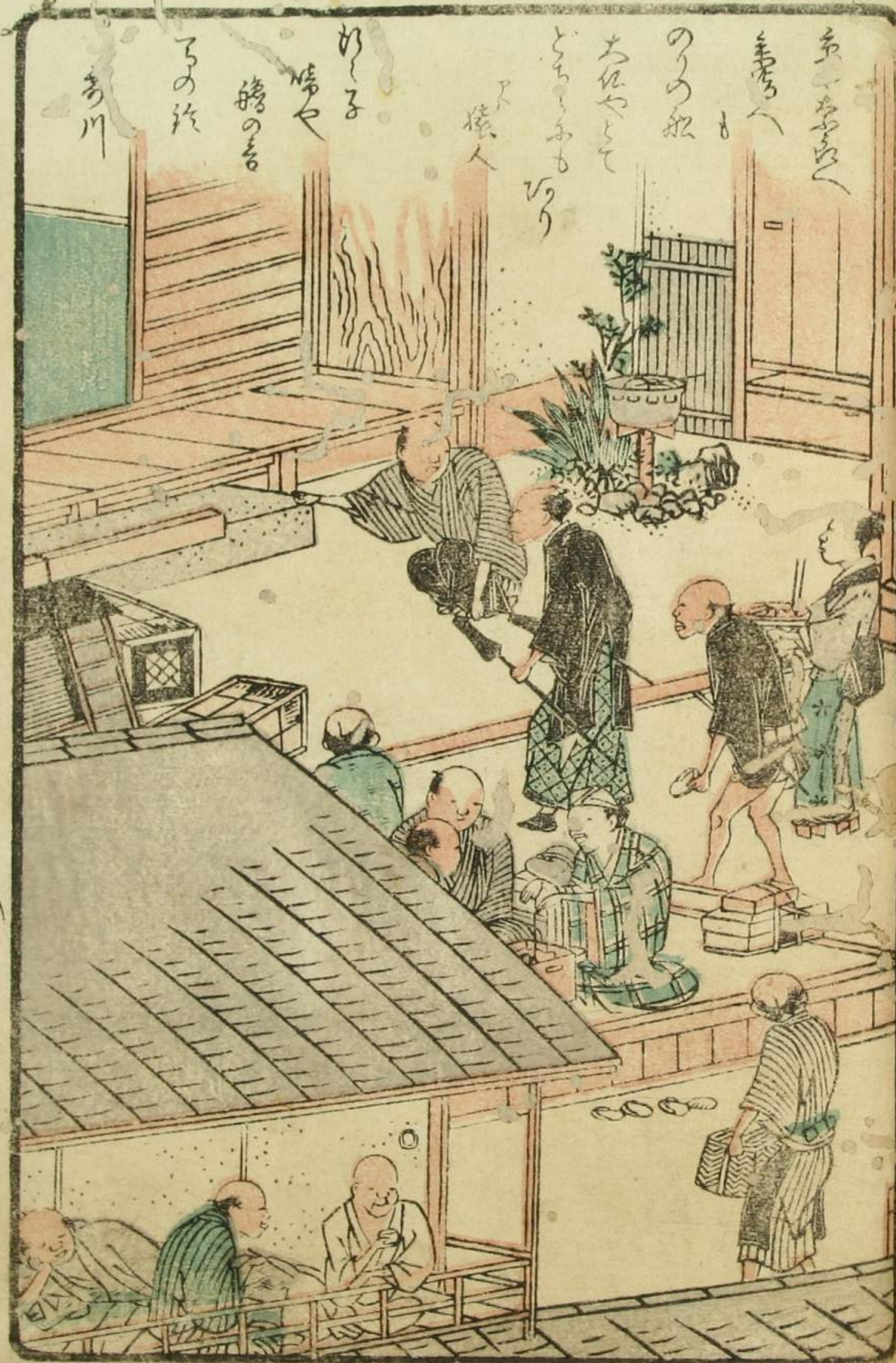
千両松三三三より淀小橋まぐ行程一里の間松林と景色より堤の間の松と云或は数株の内と其形よと名未あり是と賞して名づく

勝つるを賞して千両の名と云秀吉公の御時築をせよと云

淀小橋長サ七十六間南北岸より兩岸共に茶店旅店貸食家多く繁昌する領界より水上凡十三丁橋下り夜燈籠と照し通船の便と云

納所古くは右の北詰あり唐人雁木同所より朝鮮人末朝の時大坂より

河舟あり上り下り陸地と云



あ川

るの流

橋のま

鳴々

け子

様人

り

とらふも

たねやと

のの船

まろへ

系一各



伏見
船宿

小状刺

茶竈煙暄吹碧漪船
家正是午飧時客來
已滿篷間座猶募私
錢解纜遲

曲々桃花蘸絳雲上
舟人各帶微醺過橋
出港纜三里先占江
南春幾分

島掠隱

本堂再建

三十石夜船行

王震起

船宿相連京橋傍

目印行燈每軒行

有登有下三十石

或去或來旅客忙

出殼煎茶水泥臭

八杯豆腐當齒剛

按摩上爛呼步賣

鼻紙揚技於婆商

支度已調暇乞濟

持荷若者送入隍

筓低恰如椽下住

立欲着替數縮元

借切胴間雖稍廣

不異饅頭詰重箱

虱虫數千這移瘡

蒲團三帖糊殊強

船頭飯自中書島

取撓出時夜已央

高聲叱云勿出午

早早可消挑灯光

乘合口口諸國話

或歌或笑聲皆張

巫女山伏卜筮者

四國道者西國娘

何處素干交狐臭

紛紛傳來鼻難當

銘銘用心巾着切

合膝刺跡互怕狼

一捺着眠軒疑帶

誰人寐言全如狂

風寒波響世間靜

犬吠遙過淀川防

誠哉色本思案外

風與見得隣寐嬌

月影賺窺胸幾躁

年頃過盛好器量

一向難留息子勢

無分別起竊褰裳

枕上急呼如雷落

愕兮引手舉首望

起兮起兮寐惚暈

沾餅飲酒喰牛房

追々醒目何居負

橫平買取助空腹

傍若無人惡口吐

法外雜言不足惶

惜夫已到大事處

田舍百姓無下妨

其跡難往寐不就

為野暮風思故鄉

堪喜霧暗無人見

一夜懇切互不忌

上陸如散蜘蛛子

右往左往去四方

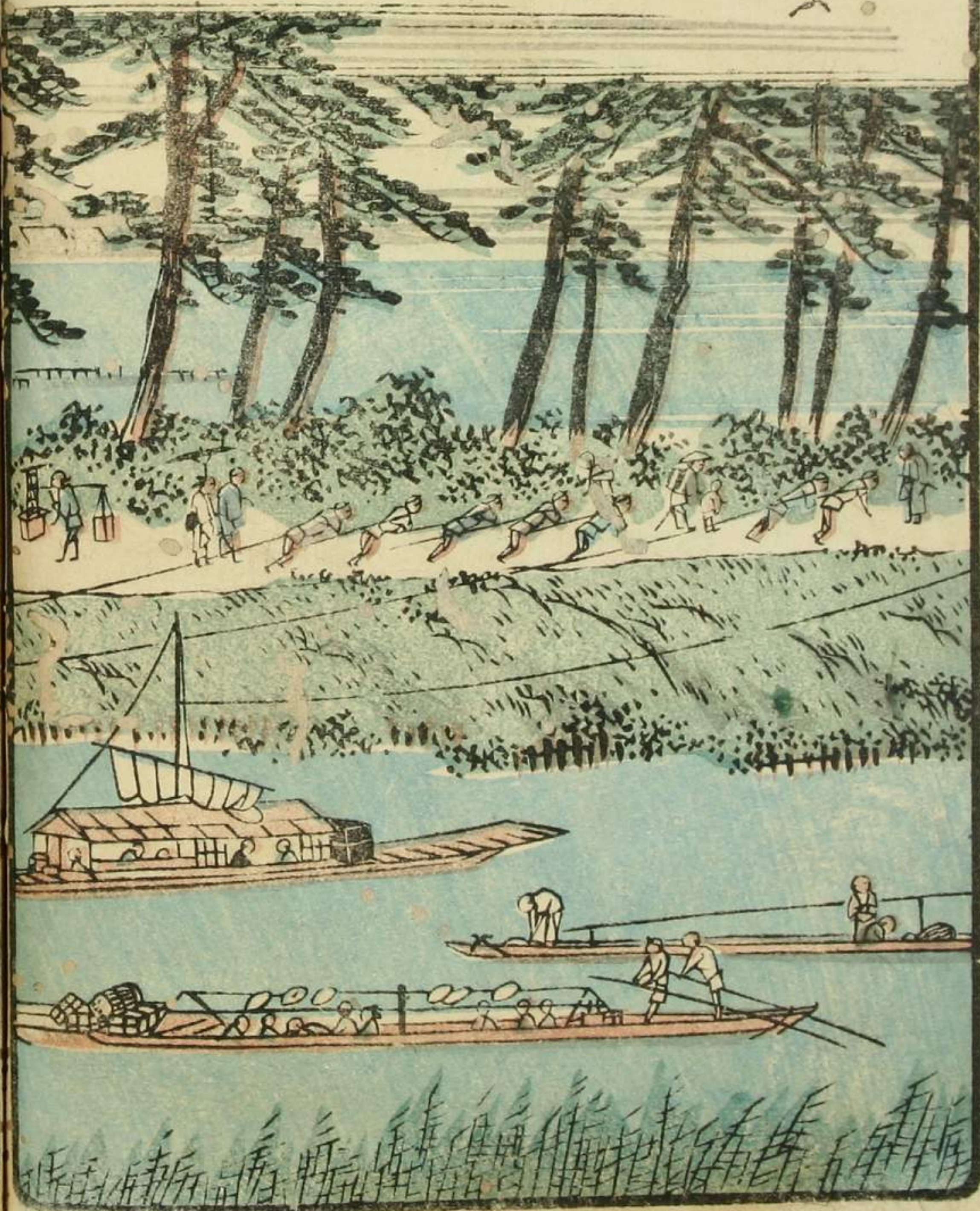
女中久因忍小便

八軒屋頭雪隱長

大名の
通り
秋の松
和及



定堤
信子
是てあや
千両松よ
翠翁
稲妻
瓜はく
渡の堤分
士朗



鳥羽川 加茂川の下流より横大路の辺より桂河の末と合す ○水壘 鳥羽川の後より

淀姫社 唐入雁木の下の淀川へ入り 祭神三座中央淀姫神 東間千観内供 西間天神

當社千観法師の 勸請ありし云 若宮 本社西より 多寶塔 鳥居の東より 火大神祠

地藏堂 本社東より 例祭九月廿三日神輿一基あり

宮之渡口 右淀姫の社の鳥居前より鳥羽川の合点と ○大下津 水壘村に

法西川 大下津村の下より 此所より大坂まで陸路行程九里の場所あり

○神木 法西川の西より 神明村の神明川 同村と経す

圓明寺 圓明寺の瀨より一藩の漢と云ふ舟より一里あり 渡の長サ百十間と

山崎 山崎寺村の下より 茶店旅舎多く有て賑あり

大山崎天王社 天王山より 祭神素盞鳥等の御子八王子と鎮座し 山崎郷中の

古戦場 天正十年羽柴秀吉明智光秀と戦ふ 世に山崎合戦といふ

親音寺 天王山の東半腹あり 本尊觀世音 聖德太子の 祖師堂 本堂の左有

真言宗 係り 木食以空僧正中興して當時の如く再建あり 高木の客殿あり

聖天堂 本堂の前右の傍より 聖徳太子の 立像あり

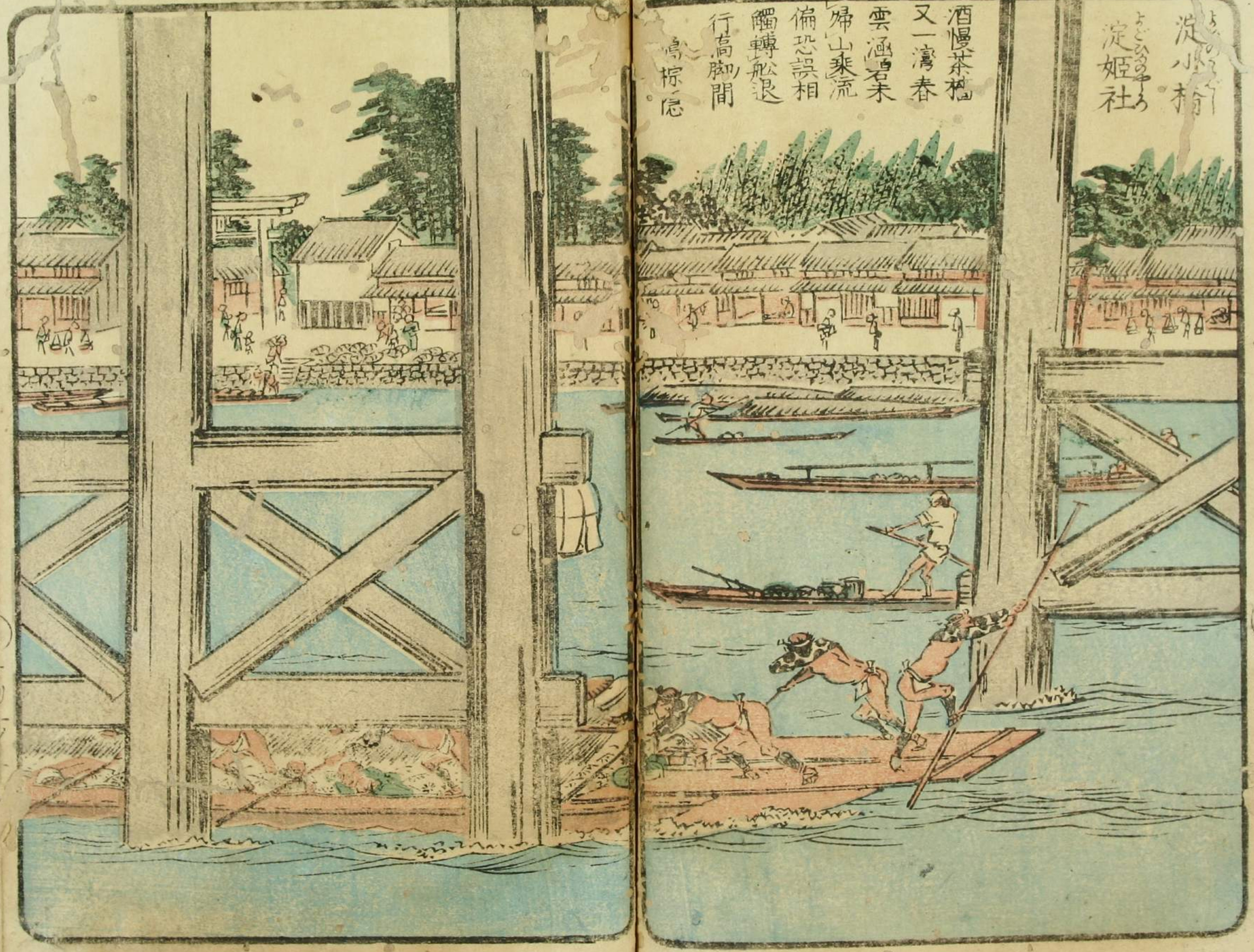
寶寺 観音の南より 補陀洛山室積寺 本尊十一面觀世音 聖武天皇と

行基大士の 三層塔 大日如來と 聖武帝石塔 庭上より

安置あり

淀小橋
淀姫社

酒慢茶拙
又一灣春
雲涵碧未
歸山乘流
偏恐誤相
觸轉船退
行高脚間
鳥掠隱



観音寺と宝寺の間ニあり文明二年山名是豊赤松一族上洛

古城跡 此城と築く

妙喜庵 宝寺の林にあり神宗とて本尊十二面観世音より千利休の所住り

宗鑑法師旧趾 妙喜庵の辺にあり宗鑑の足利義尚公の侍童として俗稱の志那弥三郎範永より入道彦他傳とよみし世に傳り

月弓の矢三郎名や二ひり 元順

有づゝ兒姿ぬきん 燕子花 芭蕉

離宮八幡宮 山修御乃の中ニあり 本社應神天皇 左右ニ隨身の奇多り 社壇の下に清水涌出 傳り細男と云

若宮武内社 本社の本社 宝藏御供所護摩堂 末社多社頭と魏たり

宮ノ今ノ八幡山に紅つせ給ふのよみ此地ニ神降る其瑞日

輪のこゝ且橋樹の木蔭より清水涌出異香薰じ此奉天

聴は達し初と奉く清水と神躰と 神殿と造営し

離宮の名に富社彦彦の如きより宿り弘仁京の御狩の時夜泊し

山名ノ離宮これより後には宮室の地と記す

管公腰掛石 八幡の門外の傍にあり荒案よみむき

君がまむ宿の梢と移くも移るくまよかづみ

関戸明神社 同所の傍にあり

大崎町観音寺 山崎美戸町の 本尊十二面観世音 高浮檀金像長一寸 八分股士不動毘沙門

天照太神 八幡 春日
關戸院 旧蹟
關戸院 山王 大宮 八王子 多
關戸院 山王 大宮 八王子 多
關戸院 山王 大宮 八王子 多

此大山崎の驛路ハ京師九條東寺の西四塚より西南より
此大山崎の驛路ハ京師九條東寺の西四塚より西南より

橋と河や向町と壁々山崎は向ひ関戸院の旧跡より是関西三十
橋と河や向町と壁々山崎は向ひ関戸院の旧跡より是関西三十

三列の官道して文禄年中豊臣秀吉公朝鮮征伐の時開く所
三列の官道して文禄年中豊臣秀吉公朝鮮征伐の時開く所

故唐街道といふ古ハ羅城門今ノ四ノ南へ官道ありて久我運手
故唐街道といふ古ハ羅城門今ノ四ノ南へ官道ありて久我運手

淀の大渡を越り山崎の橋と渡り関戸院より是より南ハ芥川宿
淀の大渡を越り山崎の橋と渡り関戸院より是より南ハ芥川宿

瀬川昆陽より西宮兵庫源磨明石に至るあり
瀬川昆陽より西宮兵庫源磨明石に至るあり

平渡口 橋本より山崎へ渡川と
平渡口 橋本より山崎へ渡川と

水無瀬川 山崎の下廣瀬村よりひくく関戸院と山城板津の国境とせしが
水無瀬川 山崎の下廣瀬村よりひくく関戸院と山城板津の国境とせしが

人ぞくろ何とたのまて水無瀬川せんのおくら朽果ゆるん 若菜のじ
人ぞくろ何とたのまて水無瀬川せんのおくら朽果ゆるん 若菜のじ

水無瀬渡口 山別橋本の宿より橋別橋上那 廣瀬へ渡川とせしが
水無瀬渡口 山別橋本の宿より橋別橋上那 廣瀬へ渡川とせしが

未 舟より下流の渡りしより渡の長廿九十間とせしが
未 舟より下流の渡りしより渡の長廿九十間とせしが

廣瀬 右一村に淀小橋より山崎まで水上凡五十町許は地なり 橋井子
廣瀬 右一村に淀小橋より山崎まで水上凡五十町許は地なり 橋井子

水無瀬殿 廣瀬村にあり羽林家が系氏旧此所ハ文徳帝第一の心 丁惟喬親王
水無瀬殿 廣瀬村にあり羽林家が系氏旧此所ハ文徳帝第一の心 丁惟喬親王

故宮の遺蹟ハ又徳帝第四の皇子惟仁親王忠仁公外祖とせしが
故宮の遺蹟ハ又徳帝第四の皇子惟仁親王忠仁公外祖とせしが

洛外北山あり山河 水無瀬宮等 幽棲
洛外北山あり山河 水無瀬宮等 幽棲

大山崎

天王山

観音寺

寶寺

窈窕漢城臨水

灣豐公曾此蓄

瑤顏閨中誇指

天王色是共當

年波賊山

西莊中秋

次の巻

暖や

山崎寺

沂風

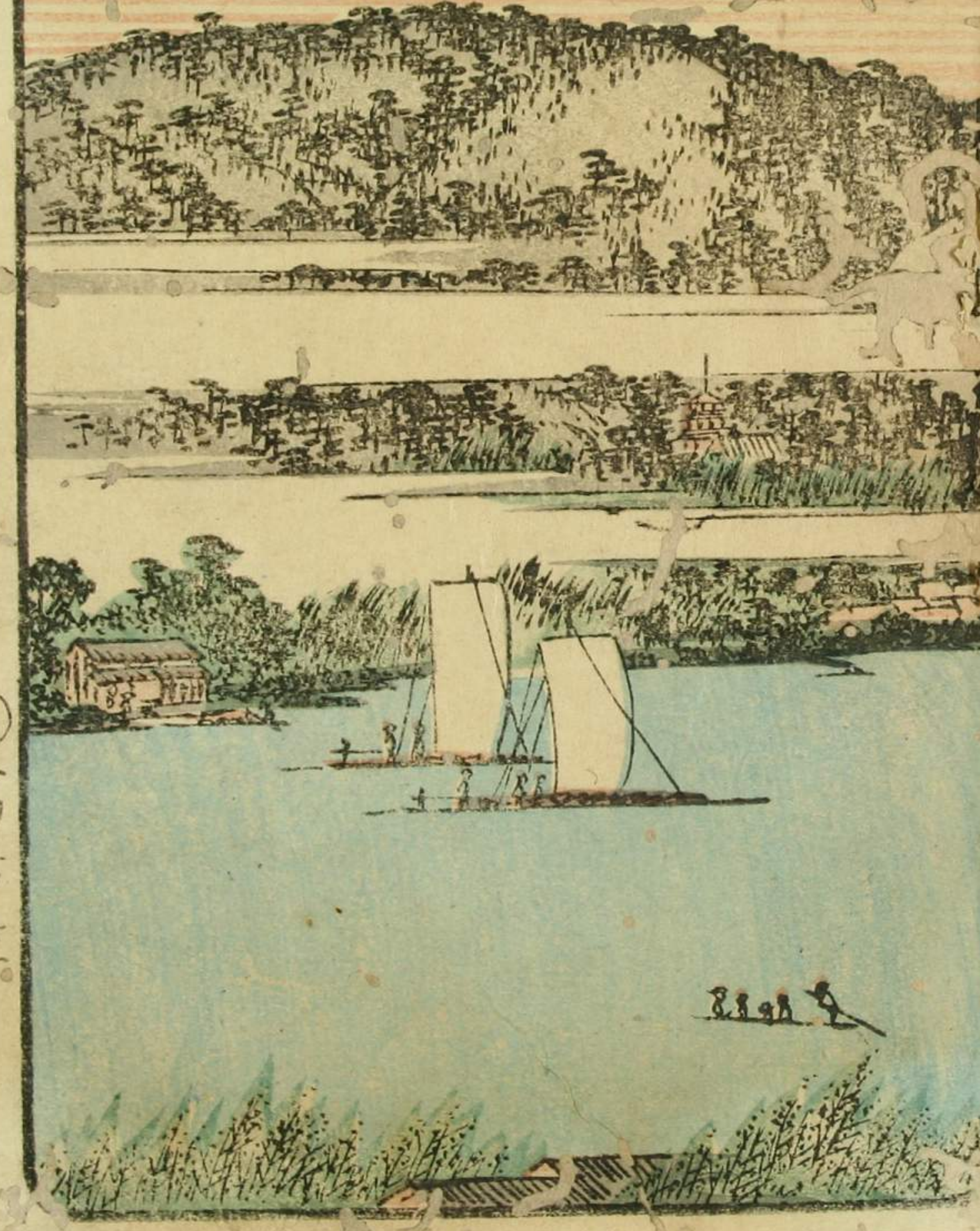
つるつる

ささる

啼や

おき

醒花



下りノ七

下りノ七

後鳥羽院御廟 水無瀬殿より 後鳥羽院遷幸のありし

阿弥陀院 廣瀬村より 正法山と号し浄土宗本号阿弥陀佛行基作

廣瀬神祠 同村より 西八王子と移り近隣四ヶ村の生土神と

水無瀬里 廣瀬村の旧号より 古くより畧之水無瀬

高瀬渡口 山根井村の東より 水無瀬の流其山間より

○上牧 高瀬村の下より 御牧のありし 則上の上牧

上牧神 上牧村より 當村おむむ井屋 兩村の

本堂より 安置と 河の高祖十二歳御自作の本像として世に

厄除の高祖と稱し 宗門の「カ女帰依」と例歳三月十二日京師より

群衆駈り上鳥羽法花渡より乗船し 船中にて題目と唱へ太鼓

とありし 淀の大河も狭くと漕下せり又九月十二日の浪花より

も同じく前夜より乗合の船より異體同心の男女押合し各祖像の

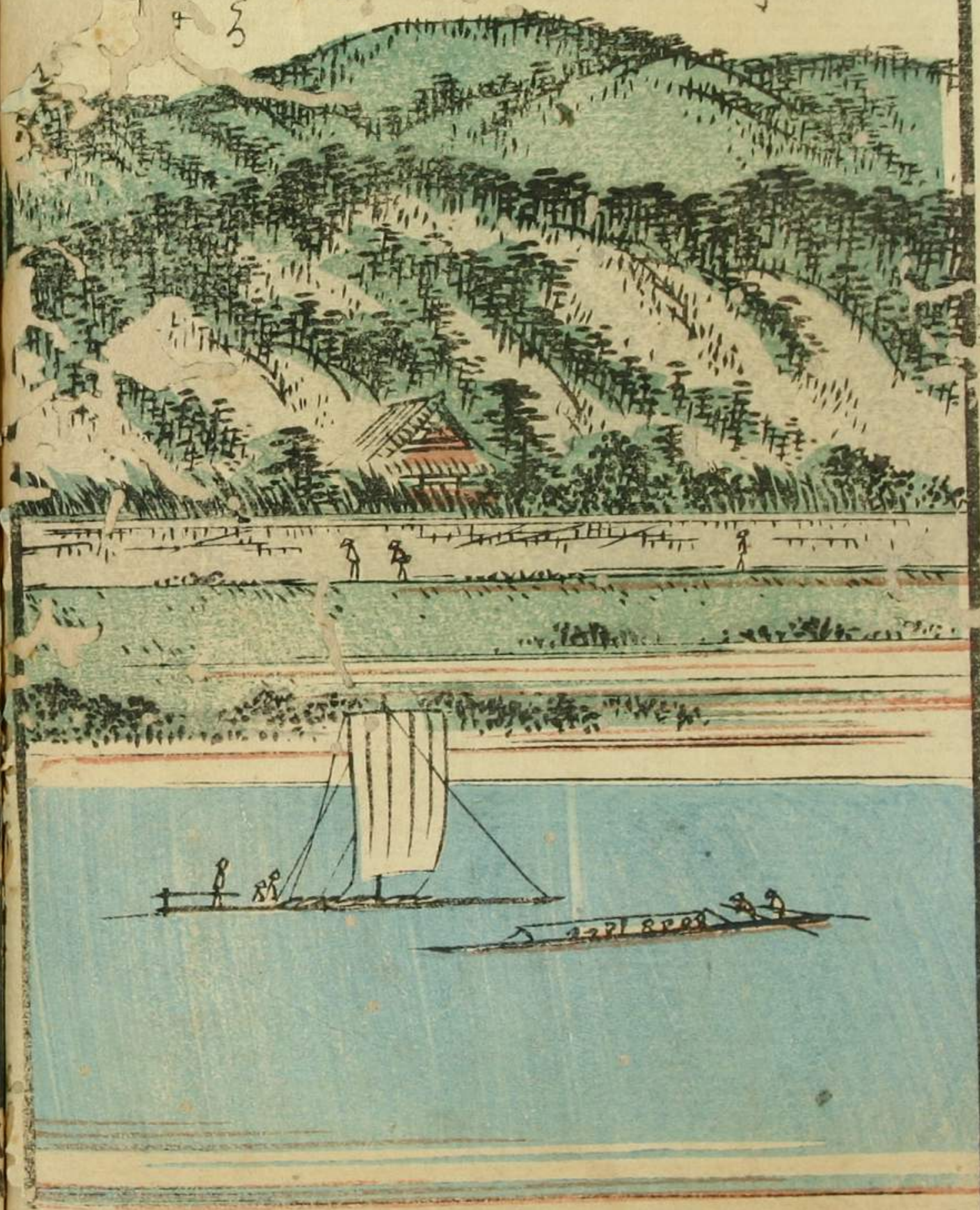
船扉と争ひ拜り平日の容易閑く事と許さば扱又當村の悉く

經宗として右春秋兩度の法會より農業と休む寺へ打らるり

諸人と餐と事し宛も生土神の祭礼の如し

上牧
本澄寺

葛蒭
付ら



抽も伸も
拜ね
はれ海
沾圃



下ッ
三

鶉殿うすの

すねりんか

おのりこ

信のまこと

うら

あねや

おごり

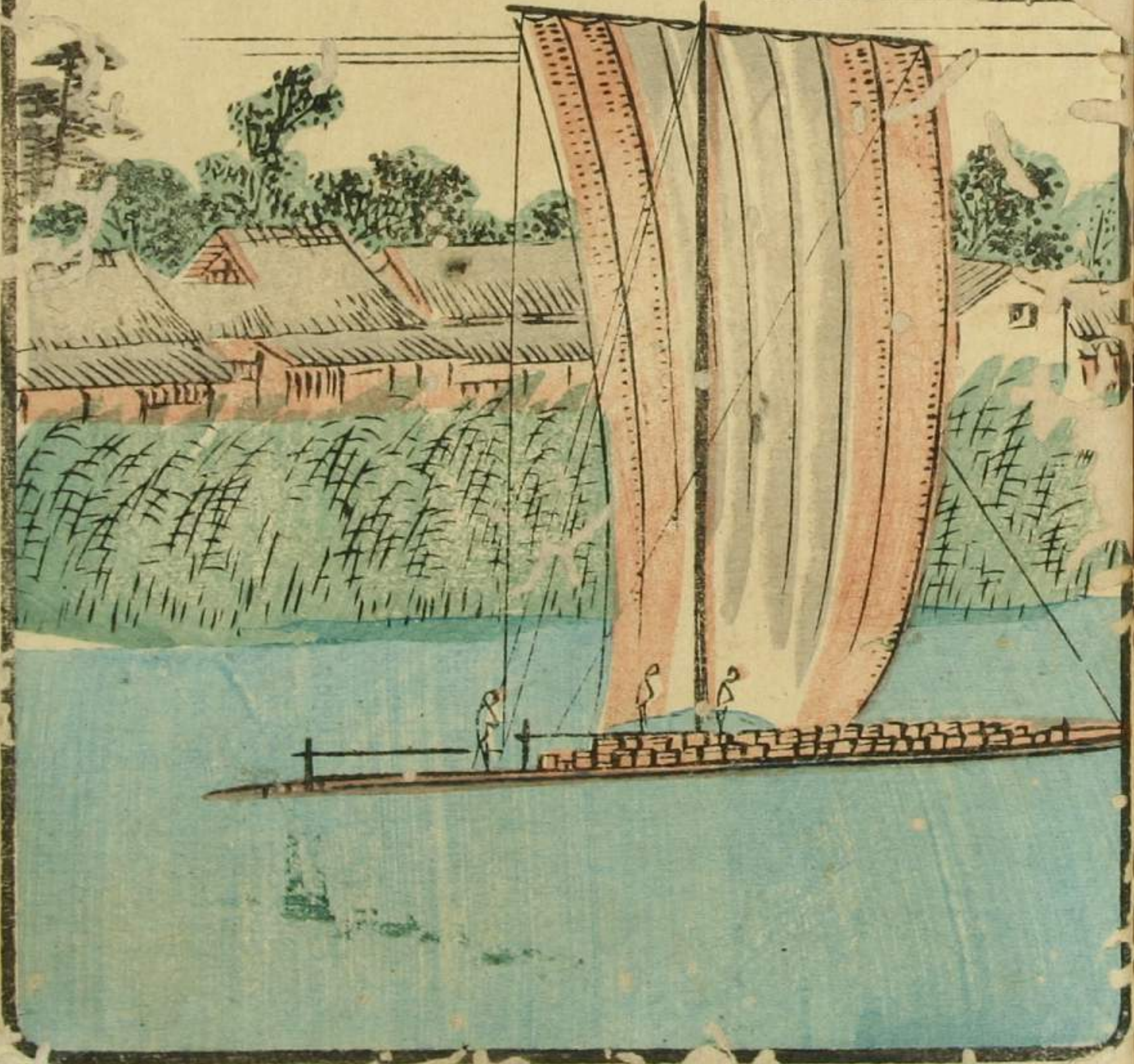
サ、おしよめ

カ丸

さきのつゆ

ごり

あや



下り
ア
上
四

鶉殿

名産蘆

上牧村の下 土佐日記ニ云 今昔月記のついでに蘆の産地云云 右村の境に生れる蘆より箒葉の義背より可なりとて 蘆葉のついでに世に名を著し 眞の蘆とて云ふ

箒葉のついでに 啼千鳥 青西 五雲

道西

鶉殿村の 前島 道西溪の下にあり村に川辺に茶店あり

尾川

三十六丁半余ありは取らう大坂まで陸路行程六里あり 前島村の下にあり一名七尾川と云水原大坂山よりゆく成合安藤天川 ほとけ冠の形に似たり名を冠とて冠柳 保也石ミルと云り旧に尾川村あり

大塚渡

大塚村の下にあり村中よはたは大塚どのと云 大塚の 實は王塚と云り其姓名詳きべ

此地の向ふ牧方の驛なれば名物の貨食船漕とせり上下の

酒殿と高き俗に吟りんる歌と云

高ひよつらひもねくまきあで実んんを吟見んる一雛

同 妻あ合の夏のはが申模さるも吟見んるとて吟見んるの庭茂

番田

大塚村の下にあり冠村より南村まで 水上九十三丁余云 前島より十八丁西にあり唐崎より十八丁北にあり 永井慶の居 城下の民に建つるなり頗る壯麗なり

城

前嶋



船ついで

小便と

女連れ

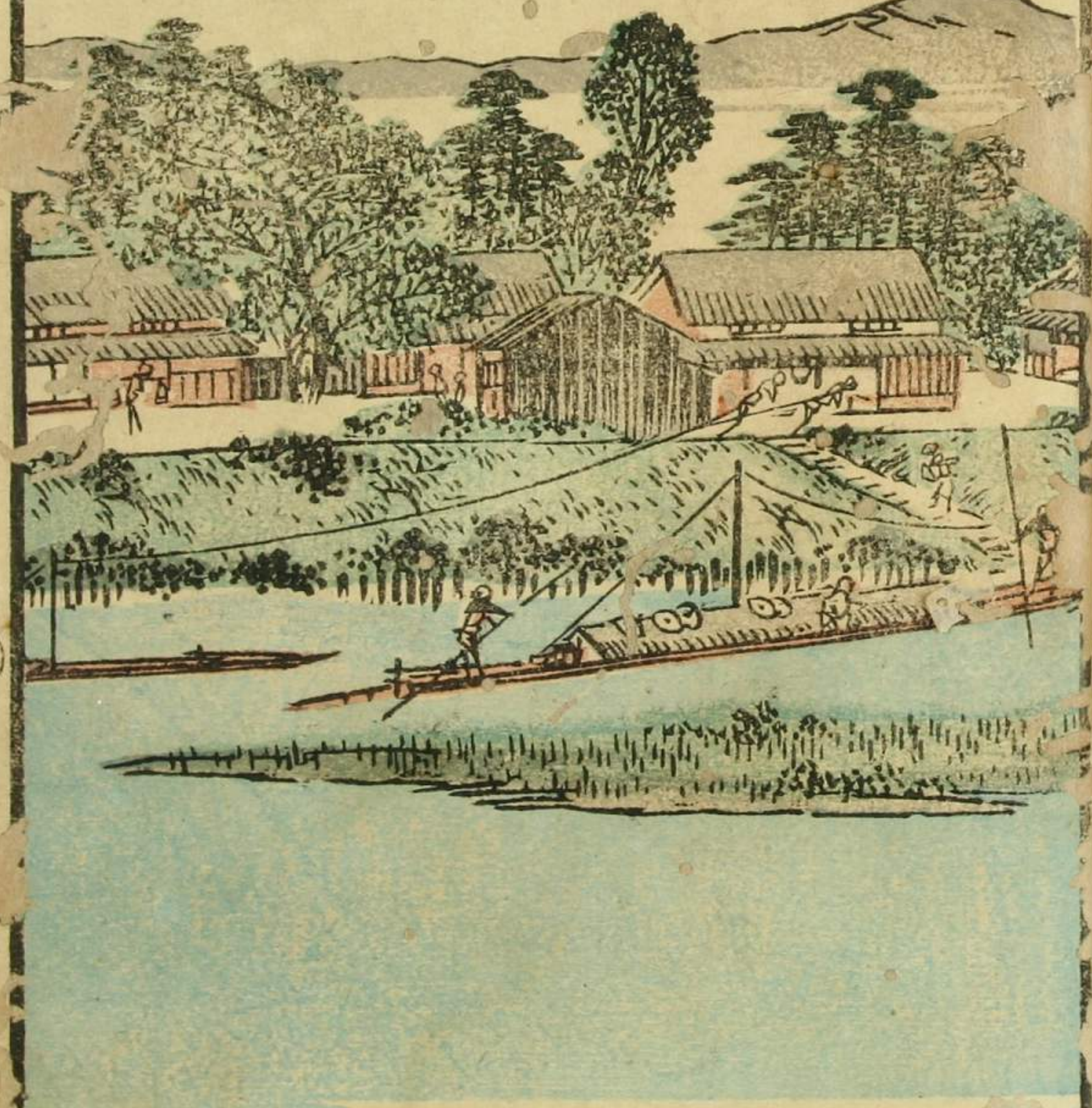
さしこも

虫

かろ

さしこ

赤襟姫成



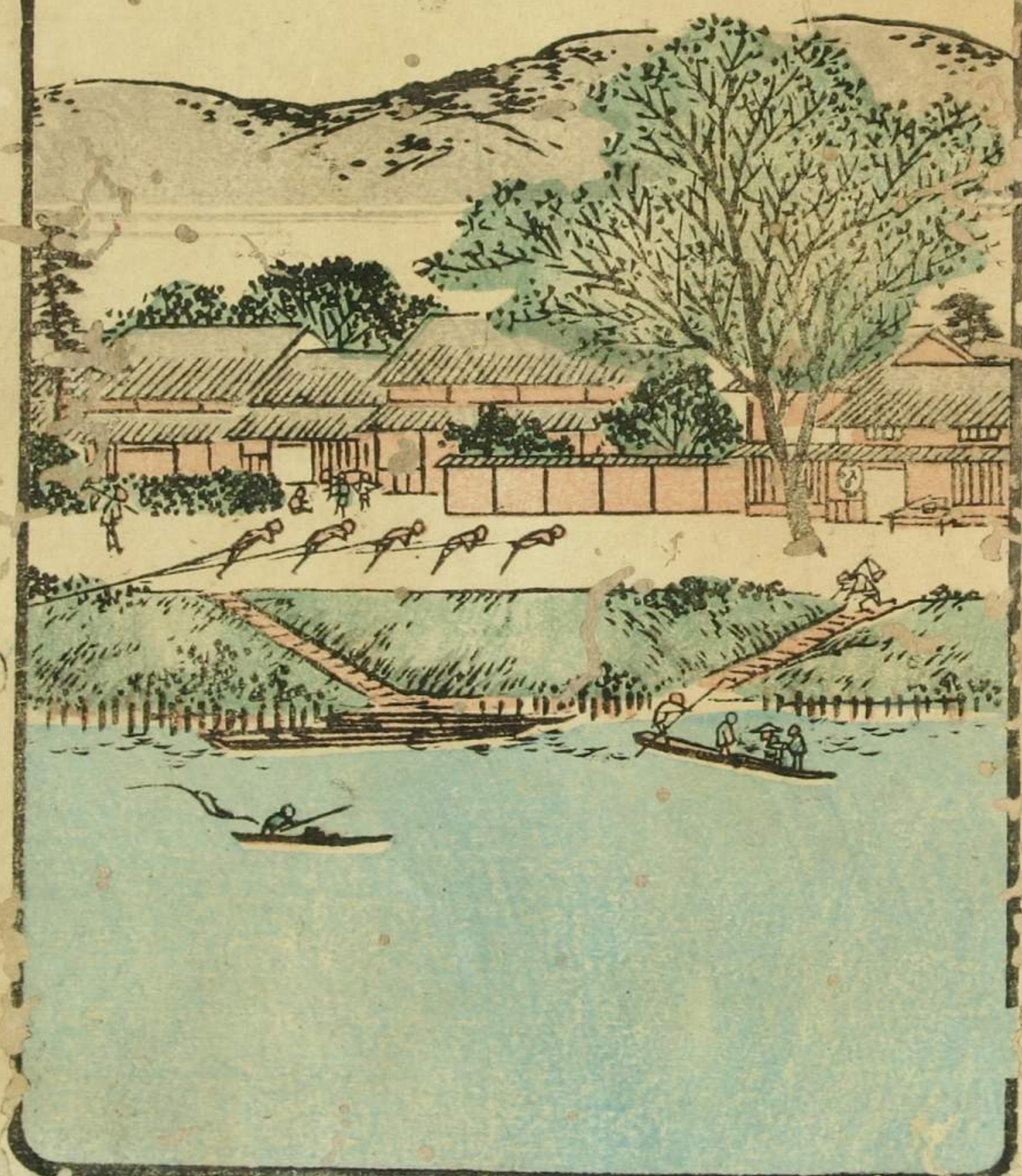
大塚

のり船の水まの
下より上り
三町より曳上げ
松尾川より船
うらみ又さ
うらみ



ゆえより
波のしめと
すむ月

百世きうか
毛樹



山城下の西街道と陸路より下る旅入山寺より此より西に唐寺三所
三所の柱が、河辺の河邊と行きなり其より高月と書け、
大木の根樹あり是と本陣と定りしれ、
通友連といふ是と高月殿と稱れしと

野見神社

例祭九月十四日撰社八幡宮八幡町にあり

芥川

本山溪と合し服部芥川と経る、
本郡原村にあり

芥川村に此川條の水上一より西國往還の官道あり則一箇の

驛として旅舎茶店多く平生賑う

兼

芥川に入津國の形をなすあり

兼

此の國のよりや人を芥川君とほりし

兼香殿

中納言

